
生と死 ～ペンは剣よりも強し～

座時点、

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生と死 ～ペンは剣よりも強し～

【Nコード】

N6203G

【作者名】

座時点、

【あらすじ】

この話の主人公である、ある学生は普通の日常に退屈をしていた。ところがある時、見知らぬ男にペンを渡されるのだが、そのペンは唯のペンではなかった…。一つのペンによって、彼の運命は大きく変わり翻弄されていく、始まりの話。

第一章 単なる始まり（前書き）

本当に拙い文章ですが、最後まで読んで頂けると嬉しいです
宜しければ、感想も書いてくださると励みになります。

第一章 単なる始まり

無彩色でモノトナスな高層ビル群の風景が過ぎる。全てが何も異常を来さずに動いている。

あまりにも日常的すぎて、何の面白みもない。むしろ、自分の気持ちを陰鬱にさせるばかりだ。いつもと同じ電車に乗って、いつもと同じように学校に登校する。刺激もなく、変化のない、単一な日々。

今日も同じ時刻に改札をすり抜け、いつもと同じ4号車に乗り込む。やはり今日も、通勤通学者で車内は溢れていた。本を読む人、音楽を聴いている人……。だが、他人の行動等、自分にはどうでもよい事だ。

「えー……当車両は7時32分発の予定ですが、ただいま、信号トラブルの影響により、急遽運転見合せております。誠に、ご迷惑をおかけしますがご了承をお願いします。代替運転のお知らせを申し上げます……」

えっ、運転見合わせ？はあ、マジかよ！！と心中で悪態を付いた。いや、待てよ。遅延切符を貰って、それを理由に学校サボろうかな？なんてな、ハハハ！！と開き直る。

いや、こういうことなんて、なかなかあることじゃない。むしろこれは、こんな日常に飽きて不貞腐れてた自分へのプレゼントなのではないかと、思った。

俺は、駅を出た。みな、タクシーやらバスに乗るために右往左往して慌しい。こんなに暢気にしてられるには、俺ぐらいであろう。さあて、何処に行こうかな。洋服でも見に行くか。マンガでも読むか。て、いうよりも10時前だからどの店も閉まってるじゃないか。と一人漫才をしてる内に高架下に歩いてきていた。

いつもは、この高架下は薄暗く、近寄りがたい異様な雰囲気醸し出していて、通ることは滅多になかった。

すると、一人の老いた男が居る事に気がついた。その男はいかにもホームレスのような薄汚い服を着て、俺のことを凝視しているのか、それとも、何処にも焦点を合わすことなくボーっとしているのか分からなかった。その男の目の前を通ろうとした時、突然。

「おい。おい。そこ。」

唐突に呼ばれたので、一瞬ドキッとした。何がなんだか知らないが、何の用だろうか。とりあえず、嘗められないように不良学生でない俺だが、いかにも不良学生のように見えるように、眉間に皺を寄せ、上目遣いでその男を睨んだ。

「はあ、なんだあ」

個人的には、これで相手の男もビビッて逃げ出すであろうと踏んでいたが

「そうだ、おまえだ。おまえに、このペンをやろう。」

話のつながりが全く分からず、唯呆然とした。何でペンなの？

その見窄らしい男は奇矯な笑みを浮かべた。それに俺は戦慄を覚えた。

「このペンは只のペンじゃねえ。悪魔に呪われてんだ。このペンを連続で20回ノックすると、何処かしらで災害が起きんだ。」

何を言い出すのかと思ったら、とんだ法螺じゃないか。馬鹿馬鹿しい。何がしたいのか、こいつは。

そいつは、またしても異様な笑みを浮かべた。そして、最後に「これは考えて使えよ、退屈から解放されるだろうへへ……」

と、言い残し、目の前から去っていった。その後ろ姿を追い掛けようとは思わなかった。それにしても、状況を未だに理解するのは難しく、狼狽えた。

渡されたペンを手にとり、投げ捨てようとして手を振りあげたが、腕に変な痛みが走り、ペンを落とした。はっとした。

その後、何もする気が起きなくなった俺は、仕方なく代替運行のバスに乗り、いつもより一時間遅く学校に着いた。

「遅れました……」

生徒はまだ来れないのか、それとも俺と同じ思考なのか教室内の生徒数は疎らだ。

「電車が遅れてると言っても、学校は休みにはならないからな。よし、やっていくぞ……」

えーと生徒が文句を言って、教室がざわついた。先生はこういう時に限って張り切りやがる。俺は全く、やる気がしない。

「えー…今日やるのは三角関数の方程式、不等式……」

すつきりと晴れた青空を上の方で見ている俺は、ペンを見て考えていた。あのホームレスが言った事はあまりにも、現実離れし過ぎていた。災害だなんて、ふん、よくまあ嘘をつけましたねえ、と誉めてやってもいい。

だけど、全て何もかも嘘だと否定できない自分が居た。また、半ば興味本位もあって、馬鹿馬鹿しいと分ってはいるものの、ちよつと本当なのか試したくなった。徐に、ペンを取り出し、言われたとおりに連続でノックをした。1、2、3、4……20……でも、何も起こらなかった。ああ、やっぱりか。だろうと思ったよ。全く、驚かせやがって、ざけんなよ。

と、鼻で笑った矢先、窓枠がガタガタと鳴り出した。そして、奇妙な感覚に襲われた。すると、教室が揺れ始めた。

「…地震？」

生徒達がぶつぶつと言い始めた。先生も、異変に気がついたのかきよるきよるしている。

その時だった、教室が大きく揺れたのは。あまりにも強い揺れに唯成す術もなく、机に隠れる事しか出来ない自分はまだにも無力だと感じた。少しの時間しか揺れていない筈なのに、物凄く長い時間のようにあった。

俺は、まだ半信半疑だった。単なる偶然だろ……。そう思う事しか出来ない、いやそうであってほしかった。

地震はやつと収まった、物が多少倒れてはいるものの、校舎やその建物には大きな損傷は見当たらないので揺れは思っていたほど強くはなかったのだろう。

今すぐにも、地震の情報がほしかった俺は携帯のワンセグで現在の情報を確認した。ワンセグによれば、震源は太平洋沖で震度は4であると伝えられた。

放課後、もう一度あのホームレスのところへ行ってみようと思った。だが、どうしても信じる事なんて出来ない。かといって、安易に検証するわけにもいかない。どうすればいいのであるかと思っただけ。とりあえず、本当にこのペンが普通の科学による説明が出来ない力を持っているのかどうか、はっきりさせねばならない。

俺はあのホームレスに会った高架下へ行ってみた、しかし、ホームレスは居ない。ちくしょう、どうすりゃ良いんだ。

何をどうして、どうすべきであるか、悩んだ。あのホームレスの居場所すら全く見当が付かない。

とりあえず、家に帰る事にした。もうこうなったら、自分で検証せざるを得ない。だが、災害が起きたことによって、罪のない人たちの命が失われる可能性は…十分にある。

だが、災害ではないか。災害ならば誰が悪いというようなことはないんじゃないか。誰のせいでもない、災害によって命が失われたのであれば、運が悪かったですねとしか言いようがない。

つまり、俺がこれを使うことによって命が失われたとしても、俺は悪くはない。きっとそうだろう。いや、きっとそうであってほしい。俺は悪くはない。俺は悪くはない……。

俺は決行することにした。自分の鼓動が聞こえ、ペンを握る手には脂汗が出てくる。

1、2、3、4……20…

何も起こらなかった。

なんだ、偶然か。はあ、びっくりしたぜ。こんなことにドキドキしてたなんて、馬鹿みたいだ。

……いや、待てよ。災害といっても日本で起きたとは限らない。世界の何処かしらで起きているかもしれない。
近くにあったテレビのリモコンを手に取り、テレビをつけた。

……嘘だろう……そこに映っていたのは目を覆い隠したくなるような光景であった。

何処の国であるか分らないが、市街地であったと思われる所の真ん中には大きなクレーターがあった。

そのクレーターは数キロにも及び、町の跡形なんてない。
場面が変わると、そこはクレーターとなった土地より少し離れた所と思われる所で、救助隊が懸命に崩れかかった建物から人を救い出そうとしている場面だった。

俺がやったのか？俺がやったのか？俺がやったのか……

同じ言葉が何回も繰り返され、頭を駆け巡った。

日没しかけた陽光に照らされ普段自分の部屋から見る姿とは違う家々の風景が見える。そして、その向うには大きな太陽。
沈んでいく太陽に何かしらの共感を覚えた。

その時ほど、自分の存在の小ささを感じたことはなかった。

第二章 事実（前書き）

ここは、主にあの不可解な存在の”男”と”俺”の会話がメインの場面です。

主人公とかの心理に飛躍があることをご了承ください。

第二章 事実

気持ち良く目が覚めることなど無く、只魘された。単なる悪夢の延長線であれば、こんなにも気分は暗く、苦しい物ではないはずだ。だが、テレビを付ければ、そんな期待等は掴みかけた助けを、一瞬にして消えるかのようであった。

ふ……ハハハハ……

俺が殺したんだ。あんだだけの人数を。普通じゃ出来ないぜ。何万という数を、たった一人で殺したんだぜ。

無意識的に狂笑と狂声が同時に口から放たれた。

慰めにも成らならず、むしろ、自殺願望が湧いた。

画面に映った殺伐とした風景と死者の数が異様に訳もなく、不可解な組み合わせに思えた。

絶対、あいつと話をしなければならぬ。

学校には遅刻する事覚悟で駅周辺で、あいつを探す事にした。先生に叱られようが、殴られようが知ったことじゃねえ。こっちは一大事なんだ。

自転車を駐輪場に置き、急いで駅前に来た。……あいつだ。間違いない、この目を疑ってみただ、やはり、あいつだ。またしても寒気のする笑みを浮かべていた。

「おい、こらあ。くそじじい。」

思わず、飛びかかりそうになったが、その一言で他人の視線を集めていることに気が付いたので、気を取り直して男に近づいた。

「やあ、いかがお過ごしかな？」

「……おい、俺が貴様に会いに来た理由を知っているんだろ？」

「はて、なんのことかのお。私には分からん。……ああ、思い出した。昨日の話についてかあ。ケケ…嘘を言っつて、キレてんのか？そりゃ、悪かったあ。なあ、大した事じゃないだろ。ちよつとは、私の軽いフアンタジーは面白かっただろ？……」

「惚けるんじゃないよ！」

「…おいおい、君も鈍感だなあ。ここで暴力沙汰でも起こしてみれば、どうなることぐらい分かるでしょう。分かったんならあ…」
掴んでいたそいつの胸倉を離した。

上のプラットホームでは発車の合図となる不協和音によって構成されたメロディーが注意を喚起していた。

「ふ……君がどうして、ここに来たか……」

少し沈黙が続いた。言葉を選んでる素振りを見せ、口元が動いた。「ここでは、話しづらい。私についてきてくれ。」

男は、手招きをして歩き始めた。俺も仕方なく付いていくことにした。着いた先は人気のない公園だった。

「……お前さんは、薄々気づいているんだろ、その様子からすれば。」

「ああ、俺だつて信じる事は初めは出来なかった。というか、今では起きた事が全て嘘であれば良いのにつて思ってる。」

「…だが、そうではない。だろ？」

「……そうだ！てめえが渡した不可解な物のせいで、俺は人を殺した事でどれだけ苦しんでいるか。」

「苦しむ？それはどうして？私には理解できない。強大な力を得て、何が苦しいとも言つものか。」

「…はあ、どうしてつて。何万つていう人命を殺してしまった事への罪の意識が理解できないだとお！？」

「罪の意識？ならば、何故人を殺してはいけないのか？むしろ、地

地球上の人口が減れば、懸念されている諸問題が解決するじゃないか。しかも、誰しも必ず死を迎える、それが早いか遅いかの違いに過ぎない。なのに、正義の味方のつもりになりやがって、結局はどうして人を殺してはいけないのか、分かってないんじゃないか？」

「……」

不意を突かれたような気がした。

「ほら、見る。やはり答えられない。」

「……いや、違う。断じてそんな事は無い。何故、人を殺してはいけないか？ 恥ずかしながら、俺的には、一人の人間が他人を理由も無く殺してはいけないのは、そいつに奪い取ってはいけない未来があり、生きる権利があるからだと思うからだ。」

「……。成る程、ねえ。まあその事は良いとして、せっかく手に入れた力をそんな風に評価していたとは。まあ、君は私に会いたい理由は、言い争いをする為ではあるまい。ちょうど、どの道、君は私と会わなければならぬ状況下にあった、なぜなら私は重大な事実を君にはまだ打ち明けてはいないからだ。」

真面目な顔をして言った。

「君は、とてつもないゲームに参加した、いや参加させたのだが、これまで起きた事は偶然ではないのはご存じであろう。只、これまでに起きた事象は偶然性によって、その場で起きたのかと思うか？」

「……！？ それはどういう意味だ！」

「……全ての物事、現象には必ず原因がある。各地で起こした災害は、様々な条件が重なって、その地で起きた。ここからが肝心だ。このゲームでは災害が起こる地点の条件等を見つければ出来れば君の勝ちだ。だが……」

次の瞬間、男はばつが悪いような顔をして、俺は思いがけない事実を突きつけられる。

「……条件を推測するには、多くの を起こさなければ、法則性を見つかる事は出来ない。つまり、君が勝つために多くの人命が失われるということだ。じゃあ、負ければ良いだろうと思うだろう。だ

が、間違った条件を導き出せば：ゲームと災害は続けられる。もし、それを恐れるなら、ゲームからリタイアをする必要がある、そうする為には、使用者の血をインクに入れなければならぬ……」

……ゲーム……人命が関わる、この事態をゲームだなんて……。

「なんだ、簡単じゃないか。それなら、俺はこのゲームからリタイアするぜ……」

男の顔から表情が消えた。

「……血を入れるという意味は、そのままの意味ではないのだよ……つまり、死だ！」

「……はあ、ふざけるのもいい加減にしろよ、畜生！てめえが勝手に引き込んで起きながら、こんな目に会わなきゃいけないんだよ！」

俺は、男の顔面を殴って、男の口は赤くなった。でも男は別段、怒るような素振りや殴り返すような気配は無かった。

「……はあ、私だって君にそんな重荷を背負わせたくはなかった……。でも、でも……こうすることしか、私には道が無かったんだ……申し訳ないと思ってるよ……でも、私のような者は託すことくらいしか……。」

男の目からは一粒、落ちていった。

「クソ！！そんな事言っただ、それが償いにはならない！どうしろって言うんだ！？」

「……君ならば、必ず出来る。だから、私のやったことを許さなくても良い。とにかく、君に掛かっているんだ！」

男の言葉の最後は声が裏返って、よく聞き取る事は出来なかった。いや、俺が冷静を失っていただけであろうか。

その男の遣る瀬無い表情は忘れられない。この超自然的な現象の前にもう引き下がる事が出来ないかと察した俺は思わず、

「……そうか、分かった。だが、俺はお前を一生恨むだろう。けど……俺は多数の人命を消した責任がある、その人々為にも引き下がる事は出来ない。少ない数でこのペンの法則を見つけて、こんな腐っ

たゲームなんか終わらせてやる。と、いっしょに、終わらせるしかないのだから……。」「

第二章 事実（後書き）

いかがでしたか、書いている私でさえもこんな状況は無茶苦茶だと思います。

彼は、この後どのようにしてゲームを制するのか……

拙い文章ですか、読んでいただきありがとうございます。

第三章 迷想

「結局、てめえは何者だ。さつきからの話と からただ者ではないんだる。本当は何者なんだ。」

一つ溜め息を入れて、口を動かす。

「……そうだなあ、はっきりとここで明言する訳にはいかないが、私は……」

すると、轟音をあげながら列車が高架を滑っていく。途端に、男が言った事がかき消される。

「……捨てられてしまったのさ……。」

「……えっ。何て言った。」

ややムツとした顔をして

「……時間気をつけろよ。そうすれば、見えてくるはずだ。」
と言い残して、人混みに姿を消した。

結局、やはり引き受けた事を半ば後悔した。あんだけの事を口で叩いておきながら、俺にはその解法を見つけ出す手掛かりは全くないから…… やり遂げる自信もないから。

頭を冷やして、とりあえず今は別なことを頭に満たして、朝飯を抜かして、急いで制服に着替えてる時、ふと思った。

やべえ、あんな遅刻なんて上等だと無駄な自己暗示をしている所ではなかった。今日一時間目から悪夢の英語の授業じゃん。しかも…… 予習もしてない。……終わった……。

いつも乗る電車の一つ遅く来た電車になんとか滑り込んだ。だが、鈍行なので、いつも乗る電車の倍近くかかる。はあ、間に合わない……。

教科書を眺めながら頭に叩き込もうとしても、チンプンカンプンだ

った。

なんで、わざわざジャパニーズがイングリッシュを勉強しなければならぬのであろうか。

チャイムが鳴る三分前に教室に入ろうとした。間に合った、間に合った。扉を開けると、すでに先生は授業を始めていた。

「おい。どうして遅れた？」

半ばキレ気味である。しかも凄い形相で睨んでいるので、たじろいでしまいそうになる。

「…全く、昨日遅延が起きたから今日も同じように遅れると思ったから大間違えた。」

「すみません、一本乗り過ぎました。」

それでも言い訳をするのかと言わんばかりに、舌打ちをして。

「そうかい、そうかい。だったら、ギリギリに着くようにするんじゃないかと、余裕をもって来れるようにしろよ。てか、お前は何しに來てるの？この学校に。」

お説教は勘弁してくれと思っていたら、いきなりの疑問形。うつと言葉が詰まった。何をしに來てるか？そんな事を深く考えたことは無かった。将来、あんな事をしたいと決めてる奴は居るだろうけど、俺の場合、漠然という物で霞んでいて明白な物が無い。

「…ふん、お前に有るわけ無いよな。もし有るんなら、遅刻する訳ないよな。」

何でもかんでも結びつけてポロツと胸に突き刺さる事を言う。他の生徒も、いつもは消しゴムのカスを投げ合ったり、携帯電話をいじくっているはずなのに、こういう時だけ一人に注目し、冷たい視線を送っているような錯覚に襲われ、異様な孤独感の中に自分が落ちていく。

とりあえず、鞆を置いて、椅子に座った。先生も淡々と授業を消化し始めた。

やはり、今はどうしても頭の中にその事を考えていたくなかった。窓から、体育でサッカーをしている生徒らを目で追った。生き生きとしていた。

無性に焦燥感に駆られた。イライラして、今あの事の状態を頭から離したいのに、なかなか出来ない。かと言って、今考えても全く法則性が見えない。まるで、巨大な迷宮にでも放り込まれたようだ。いや、もう既に放り込まれてしまったのか。ふ…、先が見えないとは、この事か。

そんな事を振り払ってくれるかのように窓から心地よい風が教室を吹き抜けていって、教科書のページがパラパラとめくられていく。

「何ポーっとしてんだ。授業聞いているのか。」

目の前には塔のように立っている先生が居た。

「…授業……上の空だよ。」

「……」

呆れたように、白い目でノートを覗く。でも、ノートは綺麗な白紙だった。またしても、重い空気が教室を包む。

すると、チャイムが鳴った。先生は俺の机を蹴って、教室を出て行った。

「おいおい、北村さんを怒らしちまって大丈夫なのか。」
隣から、友人が尋ねる。

「怒らす？短気なアイツが勝手にキレただけだろ。第一、俺はアイツに元々嫌われてたし、別に大した事はないっしょ。」

「……あ、そう。全然大丈夫には見えなかったけど、マジ平気なの？」

「ふう、もう起きちまったことをダラダラ言っただって意味はない。」

それよりも前を見て、これからどうしていくかを考えていき方が大事なんじゃないか。」

「おいおい、今、どんなに格好いい事言っただって、そんな様子じゃ説得力はないぞ。」

勉強が出来なくて、只上の空で佇むしかないのは、ただ単にサボりたいという欲求ではない。自分の心にあつた物がなんだかポツカリと抜けてしまって、その言いようのない喪失感と先の見えない不安に体の力も奪われてしまったような感覚があるからだ。まるで、電池を抜かれてしまったかのようにな。

こういう時、俺は人間というのは自ら道を切り開いて未来へと歩き続けているのか、それともビデオのように始めから終わりまで決められたシナリオを再生するかの如く歩かされているのかと、ふと思いに更ける。

答えはまだ出そうにはない。いや、今この時点で答えを知ってしまったら、生きていく意味がないじゃないか。答えを自らの手で掴めなければ意味は成さない。

「俺は、マイペースにやるんだから先生が何を言おうが、やれないものはやれないんだよ！」

「……」

半ば、嘲るような表情を浮かべ視線を俺から離れた。

半ば苛立ちが煮えたが、俺は激したりはしなかった。

やはりペンの事が頭から離れられず、俺は非力な頭を使って、ずっと考え込んだ。

地震、隕石……

日本、外国……

だが、結び付く手掛かりはない。それに引き換え、自分の頭の中には災害によって身内や友人を無くしたことに悲嘆する人々の暗澹たる表情が滝のように吹き出した。それで、俺は身を悶えるような苦痛に気が遠のく気持ちになった。

最終的に頭痛がするようになり、俺の体調は悪化した。

「先生、保健室に行っても良いですか。」

先生は、無言で勝手に行けと首を振って答えた。

のそのそと廊下を手探り状態で保健室に行くと、消毒液の臭いが第一に印象として与えられる。ドラマとかでは綺麗な校医が居るが、ここではいわゆるオバチャンという人種の校医が居るのですね。

「授業サボりに来たの？」

校医はテノール歌手のような声で尋ねた。

「いや違いますよ。頭痛が痛いんですよ。」

「頭痛が痛い？そんな日本語はないわよ。ここに来る前に国語の先生にでも勉強を教えて貰う方がよっぽど良いんじゃないの。」

「……とりあえず、ベッドを借りますよ。」

「誰が貸すって言ったのかしら。体育とかで怪我をしたり、もつと病状の悪い生徒に貸しているのに、あんたみたいなのが一つのベッドを占有するなんて、なんとも図々しいわね。」

「何でそんな嫌みを言うんですか。」

「嫌み？これは嫌みなんかじゃないわ。ここが居心地良くて毎日保健室登校するようになる前に、私が愛の鞭をしてあげているのよ。その意味を理解してないなんて、なんとも恩知らずだわ。」

「……」

はあ……

何を言おうと、頭痛から逃れる為にベッドに横になった。ババアがガタガタ抜かすが、頭の中でかき消した。

ああ、どうしてだよ。何でこんな風に苦しく悶え、頭痛や胸の痛みに耐えなきゃいけないのか。他人には分かって貰えないし、俺だけに押しつけられて、全部俺の責任です、だなんてふざけんのもいい加減しろよ。何でもそうだ、俺らに破天荒な難題を課すくせに、上はその俺らが足掻くのを面白おかしく見ている。ああ、くそう、自分でさえも分からなくなってきた。確かに、自分の行為によって罪の無い人の命を奪うのは一般的には許されない、だが、災害……

ああ、そうだ。こんな俺を選択したホームレスの責任なんだよ。

そんなに神経を尖らして、俺だけ苦しむ必要は無いつしよ。災害は災害なんだよ。まあ、できる限り被害は最小限にするけど、巻き添えはドンマイという事にしておくしかないじゃないか。自分は傷つきたくないんだから。

『殺人』じゃない！『災害』なんだ！

死んだ人にとって、これが『運命』なんだ！！

早いタンゴのリズムのように出された空論を鵜呑みにしか出来ない自分は、行動を起こせず、怖じ気によって前進する気力は失われてしまった。

誰だって恐怖心と妬心を隠し持っているのだから。

そんな自分があまりに情けなく恥ずかしながら、枕を濡らしてしま
った。

第三章 迷想（後書き）

まとまりの無い、ダラダラの文章で誠に申し訳ないと思います。
今回、執筆中は色々と体調を崩したり、試験があったりで大変苦し
かったです。

第四章 捕縛（前書き）

かなり書き終わるのに時間がかかってしまいすみませんでした。>
m (——) m <

無気力になりかかって、やばいかと思っただけど、8月に入る前に何とか書き終わりました。（*^^）v

みなさんが望んでいたようなシナリオとはちょっと違った内容にしてみました。なので、不満が有るかもしれませんが、こんな作者に御付き合ってください。

第四章 捕縛

俺は学校を飛び出した、それしか無かったから、

校門を出て、平日の今の時間帯では人通りの少ない道を抜けて、コンビニの角を折れて、右手に建設中のビルだかマンションだか知らないが、喧噪を背にして、いつも歩いている道なりとは違う雰囲気を感じながら歩いた。

歩いていて、俺はふと思いついた。

そつだ、図書館で情報収集でもしよう、と。

浅はかな考えであるが、俺は愚かにも高を括った。

図書館の前に来ると、そいつは俺に対して身構えているかのようにあつた。

中に入ると、司書がどうして平日のこの時間に制服のままの青年が来るのだろつかというような、疑念に満ちた視線を送った。また、雑誌等が置かれていた所には、平日、暇なおばさん連中がペチャクチャと雑談を交えていた。とりあえず、地図とかの資料を当たった。陳列された蔵書の放つ緊張感を漂わせるオーラに半ば狼狽した。

2、3列棚を見て、ようやく地図を見つけると、俺は高揚し勝ったような気分になったが、一瞬にして崩れた。

どうにもこうにも、そう簡単に法則なんて見つかりはしない。

手には脂汗が出ていた。

とりあえず、訳も分からずにインターネット閲覧で情報を収集しようと思った。

案の定、パソコンは誰にも使われていなかった。

『災害 最近』と入力し、検索に掛けてみると、思うように自分が欲しい情報が手に入らないことに苛立った。

仕方がないので、個々の災害を入れて検索するほか無かった。インターネットは大量の溢れていた。

検索ワードを変えてやってみると、一応対応の情報は手にはいるが、詳しい情報に手が届かなかった。

やはり、ここまでだったのか、と落胆しかけた。しかし、偶然にある地図のウェブサイトをクリックし開くと、俺は驚いて思わず、席を立った。

その世界地図には隕石が落ちた場所が示されていて、隕石の落ちた場所と、地震の起きた所の場所を世界地図で見ると、緯線に平行であったのだ。

冷静に見てみると、隕石の落ちた場所はイランの首都、テヘランである事が分かった。

そして、俺は確信した。

-間違いない……こういう事だったのか-

心中で一言呟いて、胸ポケットに挿してあった”ペン”を取り出す。
「法則は、緯線に平行に災害が発生するはず」

胸元にペンを持って…

カチツ…カチツ……20回ノックした。

勝った。呆気無かったな。

と、満足げに呟いた。

晴れ晴れとした。

無意識に足は外に出ていた。

だが、真実はそう単純な物ではないと、まじまじと見せつけられるのだった。

電気店の前を通りかかったとき、俺は愕然とし、希望を打ち碎かれた。

「…速報です。今日、十一時頃 アイスランド沿岸において大規模な津波が発生したとの情報が入ってきました。詳しい情報が入り次第お伝えします……」

電気店に置いてあったテレビは淡々と情報だけを伝えた。

俺はにわかに信じられなかった。

アイスランドでは確実に二つの地点の緯度より遙かに上じゃないか。いったい、どういう事なんだよ。

訳が分からなくなった。道行く人々が自分の事を嘲ている様に感じた。

上を見上げると、青かった。

きつと、俺の顔も別の意味で青かっただろう。

酷く狼狽し人目に至極恐怖を感じ、逃げるかの如く人気のない路地に駆け込んだ。

走っていて、植え込みに足を引っかけたその時だった。背後に黒い影が現れ、頭部に激痛が走った。そして、その後の記憶は、無かった。

気がつくと、何処かの一室に居る様だった。俺の手は縛られ、携帯電話も無かった。

最初、窓からの陽光に目が眩んだが、見渡すと、ここはオフィスであつたようだ。なぜなら、デスクやチェア等が無造作に端に置かれ、パソコンや書類等が散乱していたからだ。

その後、俺は状況を整理してみた。

- 誘拐 -

その二文字が頭を過る。

それに伴って、額に汗が滲む。

俺を運び込んだのだから、単独犯ではなからう。それより、もっと不思議で仕方がないのは、俺を誘拐する目的である。

しかし、そんな事は俺には想像できなかつた。

手を縛られ、携帯も無い状況でどう外部と連絡を取るか、というのも頭を悩ました。すると、ギーという音が扉から聞こえたと思うと、人影が見えた。

数十メートル先の扉から現れた人影は一人だけで、なにやらコンビのビニール袋を片手に持っていた。

すると、そいつはこちら側に向かつてきたが、俺には一言も口を聞こうとはしなかつた。

不思議だつた。

すると、そいつは適当なイスに腰掛け、片手に持っていた袋から弁当の様な物を取り出し食べ始めた。

「おい！！俺をここに連れてきたのはどういう目的だ！」

大声で叫びそいつに問いたが、冷ややかに箸を進めた。

全く気にも掛けずに食事をしているそいつに対して幾分の空腹を感じているのも相伴って、さらに俺は苛立ちを隠せなかった。

「オイ！！返事くらいしろよ！ このクズ野郎！卑怯者！」

俺は罵声を浴びせてやった。

しかし、そいつは全く顔色一つ変えなかった。まるで、聞こえていないような素振りです。

すると、ドアからまた一人の男が現れた。

風貌は二十代前半の若者に見えるが、態度等については、最初に入ってきた奴よりも太々しい素振りであった。

二番目の奴は俺に向いて、不可解というのか、不気味な笑みを浮かべた。

「もう気が付いたか。ハハン、君はどうしてこんな所に居るのでしようか。」

怒りを誘うような口調に半ば怒りに身を任せそうになったが、ここは抑えた。

「……………どうしてって、こっちが尋ねたい所だねえ。二人で一人を襲うなんて、卑怯者の弱者のする事だね。」

「あれ？君は立場を弁えていないのかな？」

二番目の奴は、イスを蹴ってやって来た。

「バットで殴って、こんな口を叩けるなんて大した者だわな。」

「俺をこんな風にする目的って何なのか、教えるよ……豚野郎！」
それと同時にそいつに唾を吐いてやった。しかし、そいつは予想に
反し、狂笑をした。

それを聞いて、背筋に何だか冷たい物が走ったような気がした。「
ハハハ……。お前をここに連れてきたのは、復讐のためだからさ。お
前は、俺の復讐の生け贄なのさ。ハハハ……。今の内に心にあること
を全て吐いてしまえば良い。なぜなら、冥土に逝くのに無念を残し
てしまうのは、悪いからね。」

「……ええ？ ……冥土？ 言っている意味が全く理解できない、
むしろ、理解など出来ない。理不尽と言っても、言い尽くせねえよ。」

「じゃ、嫌でも理解させてあげるよ。」

二番目の奴は、笑みなのか、引き釣っているのか、よく分からない
表情でさらに接近し、胸ポケットに刺してあった例の”ペン”を取
り出した。

「…オイ！何をするつもりだ！」

その時だけ俺の声が通ったような気がした。

「お前の命は…ほら、俺の手の中にあるよ。このペンでね……」
そいつは、ペンの頭を俺に向けて、ノックし始めた。嫌な予感がし
た。

「あんな風にしたり。こんな風に殺して、写真に撮って、あいつに
送りつけてやっても面白いかもね。」

7…8…9…

「お前は何も出来ないのさ。手は動かせないし、携帯もないのよ。ハハハ…。」

13…14…15…

「お前は、どう死にたい？ハハハ…。」

18…19…20。

また、罪のない人たちが死にました。

「……質問したい事がある、何故、俺にした？復讐って何なんだ？」

「フフフ…、お前に知る権利はない。」

「ふざけんな！！」

さらに増して、大きな声がでた。無感情に弁当を食べていた一番目の奴も、さすがに俺の事を見た。

「さっき言ったじゃねえか！無念を残さないってさ！俺は最低限、それを知らないと死ねねえよ！」

「…そうだな、俺がお前を生け贄に選んだ訳というのは、復讐と多少結びついている。お前の制服を見る。胸の所に校章があるだろ。それが答えた。」

「……？どついう意味なのか、さっぱり分からない。」

「そうか、そうだな。まあ、簡単に言えば、お前の高校の校長に復讐をしたいのさ。」

「どうして？成り行きが分からない。」

「……」

そいつの表情に一瞬、陰りが見えたような気がした。

「そこまで、言わなきゃいけないのか？なあ、俺はお前に過去を自白する為に連れてきたんじゃないよ。」

「でも、俺は納得出来ない。」

「……そうか。ならば、教えてやろう。お前の高校の校長である山崎は、俺の親友を事実上殺した。だから、奴に復讐をしなければいけないんだ。」

「どうやって殺したんだ？」

「…奴が直接手を下したんじゃない、結果的に親友が自らの命を絶つた。ある事件のせいで。それに当時の山崎が関わっていた、というのが事実だ。」

「その事件って何だ？」

「それは、今ここでは話したくない…。それを話す準備が出来ていないから…。」

部屋に沈黙が流れた。

「……俺は言いたくはない。だが、警察は俺の話聞いてはくれないだろうから、お前に話してやろう。」

話した所で、勿論、俺は奴に殺されるという事実に対して納得もしないし、賛同もする気もなかった。ただ、ここで時間稼ぎをして、打開策を模索するのが目的で、何とか引き込んだが、奴の話す内容に付いて興味が湧いてしまった。

第五章 告白（前書き）

8月中に投稿できれば良いと思っていましたが出来ませんでした。かなり、シリアスな展開だと思いますがお付き合いくださいませ。

第五章 告白

「その事件の本当の始まりは、前に遡^{さか}らなければ説明する事は出来ない。だから、全てを伝えるのは出来ないが、出来る限りそれを順を追って、伝えていこうと思う。しかし、この事については、確かに俺自身に全くの過失がないとは言いつれない、けど、俺の意見としては、どうしても山崎の過失の大きさに目が行ってしまう。その当時は、俺も当事者もまだ未熟だった。だからこそ、導いてくれる先生の存在が大きかったんだ。」

俺は黙って聞いてあげた。

彼は俺の友人だった。

彼は明るく社交的で他からの人望が厚く、成績もそう悪くはなかった。俺はあの日まではそう思っていた。

彼はそのような態度をとっていたにもかかわらず、彼は人間不信だった。

人間不信になったのは、昔彼の親友に裏切られて、親友の本音を知ったからだ。

その親友に言われた一言を彼は俺に言い残した。

「……君に一切の魅力は感じない、ただ、君と一緒に居れば、僕の利益になると思ったから。ただ、それだけ……。」

彼は、心の傷を他人に見せないように強がっていただけだった。

当時のまだ大人からみれば幼い俺はそんな事に気が付かなかった。強い保護具の奥にあった、彼の裂かれた心を俺は見る事が出来な

った。

当時、学校では盗難事件が相次いでいた。そんな時だった、彼の事をよく思わない‘屑ども’が彼に手を下したの。

彼は人の物を盗むような人間ではなかった。

しかし、‘屑’は嘘の目撃証言をした。本当は、‘屑’が犯人だったのだが、グルの‘屑’があらかじめ盗んでおいた、彼の財布を突き出して、「こんな物が落ちてました」と言っ、それを物的証拠にした。

学校側も盗難事件に頭を抱えていた。盗難事件の噂が漏れる前になんとしても丸く収めたかった。その結果、彼は犯人に仕立て上げられてしまった。その犯人に仕立て上げて、丸く収めようという腐った策略を考えたのが、山崎だった。

山崎には、学校と会社の違いを分けずに考えているように感じた。

山崎は、疑いもせず彼を犯人だと決めつけた。学校の利益……：自分の利益の為

すぐさま学年集会を開き、山崎は差し出て盗難事件の犯人を捕まえたと明言した。俺は、すぐさま職員室に居る山崎を捕まえて、話をした。

あいつは絶対にそんな事はしません、と何度も何度も言ったが、受け入れてはくれなかった。他の先生に山崎は干渉した。そのせいで他の先生は口を挟む事は出来ず、黙って彼が犯人に仕立て上げられていくのを指を^{くわ}啜^{くわ}えて見ているだけだった。ただ、俺が特に頭に焼き付いているのは、山崎のあの卑しく見下した視線と、嘲るような口調だった。その時の屈辱は、今でも忘れられない。

ほどなく、山崎の口から直接漏れたのか知らないが、噂で犯人が彼

なのではないかと学校中に伝わった。そして、彼も山崎に反抗する事無く、山崎に処分を言い渡された。いや、あの時に山崎に学校を辞める事を強要されていたのかもしれない。俺は、他の生徒に彼が犯人ではないと弁明し、あの‘屑’どもが犯人だと言った。しかし、反応は冷たかった。「証拠は?」、「^{かほ}庇うつもり?」などと言って、彼に対する今までの態度から手のひらを裏返したようだった。そういつた状態になって、彼は登校しなくなった。

彼が学校に来なくなった数日後、俺は彼の家を訪ねた。

部屋に入ると、彼の姿は無く、代わりに紙があった。

彼の遺書にはこう書いてあった。

「私は私自身を哀れな人だと思えます。よくみんなから、いつも顔に笑みがあつていいねと言われましたが、それは楽しい事を考えていたのではないのです。むしろ、自分の今までを振り返って、自らを嘲笑していたのです。私は、他の利益の為に心を引き裂かれてきました。その考えが常に私の心を侵し、これから訪れるであろう未来に対し空虚な喪失感に苛まれるのです。つまり、私にとって‘未来’というのは‘悲苦’と同じ意味なのです。私は人生を生きたのではなく生かされていたのです。私が私自身の手でこの身を滅ぼすという行為は、私を利用するであろう人々に対する唯一の抵抗であると私は思いました。利己主義に溢れ、他人を利用し続ける人を罰したり、反抗して懲らしめる事は私には出来ず、ただ私は利用され滅んでいくのです。なぜなら、私は魅力のない人間ですから」

遺書は始めの方は書きなぐったように書いていて読むのに苦労したが、終わりに近づくにつれて、何かを感じ取ったように、整然とし

た文字になっていった。

俺は、その時はっきりと事の重大さを理解し、少ない可能性に掛けてみた。

まだ、間に合うかもしれないという期待が俺を走らせた。

彼を探し始めて30分程の時だった。大通りを跨ぐ歩道橋に普通とは違う雰囲気の人影が目に入った。俺は、その人影を見て確信した。早く止めなければ、最悪の事態になってしまうという焦りが、さらに俺を動かした。彼に近づいていくけれど、彼は柵を跨ぎ、欄干に足を載せて、手を広げた格好になった。俺は大声で彼の名を叫んだ。しかし、叫びは往来する車の騒音の中に消えた。その時、彼は手を鳥のように広げた格好で欄干から足を外した。彼は、重力に逆らう事は出来ず、落ちていった。その様子は、まるでコマ送りをしているドラマの1シーンではないかと思つた程だった。彼は、前からきた大型トラックに正面からぶつかつて、変な形になって数メートル吹っ飛んだ。道路に叩きつけられた彼の体は、関節の可動域を超えていて、数日前まで普通に歩いたりしていた事を疑うくらいに壊れてた。

俺は、彼が生きている事を願っていたが、すぐに彼が即死であつた事を祈つた。トラックに目を向けると、前面がぐしゃりと曲がついて、その衝突の凄まじさを伺う事が出来た。しかし、トラックは前もつて異変に気づきブレーキを踏んでいた事と、後続車がまばらだったので、彼を覗けば事故は大惨事にならなかつた。

彼の体は、間もなく病院に運ばれていった……。

もちろん、彼が二度と俺の名を呼ぶことはなかつた。

「山崎の利己を世間に知らしめ、社会的にも殺さなければならぬ。だから、お前を誘拐し、山崎とマスコミに同じ条件を伝え、山崎が利己によって条件を呑まない事を世間に知らしめてやる。そうすれば、マスコミに叩かれて、追い込めるはずだ。」

「……………、その彼が死んだ経緯については物凄く気の毒だと感じたが、お前が俺を使って、山崎先生に復讐をするのは、俺から見てもお前のエゴじゃないか！そんな風に言う前に、俺を誘拐した事を償うべきだ！」

そう言うと、そいつは衝撃を受け、俯いた。しかし、そいつは居直って態度を一変した。

「だから？だから、どうしたっていう？もう、この世界自体腐っていたんだ。こんな世界に生まれた俺も腐っていたし、山崎も専ら腐ってた。だから……………」

そいつは、懐から拳銃を取り出し、俺は何とも言えぬ緊張が走った。

「俺は‘屑’を既に抹殺した。後は、お前と山崎を殺した後で、俺は死ぬつもりだ。」

俺の口から言葉が出なかった。こいつは、もう手遅れだった。

「まだ、殺人を犯さなければ、山崎を証拠を揃えて、それなりの責

任を負わせる事だって可能だったのに、どうして？」

「……、もうダメなんだよ。何もかも……。」

すると、そいつはさっき話していた落ち着いた態度から変わって、狂笑をしながら銃を振り回した。

「ハハハ……。死ね、死ね……。」

誰かに話し掛けているような変な素振りには、俺にあいつがないかという疑念を確かなものにする要因になった。

外では慌ただしくサイレンが鳴り響き、そいつに焦りの色が浮かんだ。

「……チツ……。察の野郎……。よく嗅ぎ付けて来やがったな。」

そいつは端々に悪態をつきながら、独り言を並べた。

「吉川誠、お前達は完全に包囲された。大人しく、人質を解放し、投降しなさい。」

拡声器を通じて、何とも冷酷な声がした。

そいつは窓際に立って、

「うるさい！ 察ども！ 俺は、こんな所で捕まるわけにはいかないんだよ。人質を解放したければ、かかって来いよ！ 役人の犬どもが！」

そいつは頭に血が昇って、どうしようとも警察と戦った所で、己がどれほど無力であるかを理解出来ないようだった。いや、理解していたのかもしれないが、認める事に恐怖を感じていたのかもしれない。

「…ふっ…。じゃ、望み通りに我々は突撃を決行しよう。もう一度言うておく、投降するなら今の内だ……」

その瞬間、銃声がし、窓ガラスが割れた。

そいつは小さい拳銃の引き金を引いていた。

外では、大きな悲鳴や怒号がした。

そして、沈黙が流れた。警察は、交渉をしても無駄と判断したようだ。

複数の階段を登る足音がしている中で、そいつが握った拳銃は小刻みに揺れていた。

そして、銃声が再びこの部屋に響いた。

そいつは俺を無理やり立たせると、銃口を俺の蟀谷に押し当てた。

すると、扉越しに警察官のシルエットが見えた。

「おい！！入ってきたら、人質の頭をぶち抜くぞ！」

そいつは噛みそうな勢いで言った。

そいつは俺に銃を突き付けながら、窓の方に少しずつ後退して行った。

「こいつが死にたくないなら、撤退しろ!!」

大きな声で外へ叫んだ。

その時、そいつの体は操り人形の糸が切れた様に倒れた。顔は蒼白だった。

そいつは、俺が死ぬ前に警察の狙撃によって射殺された。

その後、警察官が中に入ってもう一人を取り押さえて、敢えなく、事件は幕を閉じた。

あいつが死んだ様子を例えるなら、あんな虚勢を張ってた人間がまるで”人形”にでもなるかのような、妙な感覚がした。

俺は警察署に連れて行かれて事情聴取をうけた。そして、あいつが麻薬に手を染めて、3人の殺人を犯した事を知った。

「家まで送っていいんか？」

警察官はそう俺に尋ねた。だが、俺は眼前で人が死ぬという光景を目の当たりにして、警察官と共に居られるような気分ではなかった。自分は死んでも良いと思っていた。そうすれば、苦しみから逃れられると思ったから。しかし、他人の死について、俺は避けていた部分があつた事を否定出来ない。

テレビといったフィルターや噛み砕いた情報ではなく、生で人が死ぬという光景は俺に大きな衝撃を与えた。

第6章 暗澹（前書き）

長くなりそうだったので、とりあえずここで切っておく事にしました。

今回は一段と物凄く忙しく、書く暇が無くて、なかなか進行しませんでした。ようやく書くことが出来ました。大変お待たせしました。（＜―＞）

今回も駄文にお付き合いください。

第6章 暗澹

いつにもなく、暗い気持ちのまま歩いていた。方向もわからない…。

肩が重いのは、罪悪感という重荷の上に“衝撃”が加わった為だろうと思った。そのせいなのか、姿勢は前かがみになって、足取りは若者らしい快活とした歩みが俺から消え去ったように鈍かった。ともかく俺はその時、人に会う事に対して怯えていた。だから、警察の申し出を断って、バスにも乗らずにこうして歩いている。歩く度に、街灯が揺れて、俺はどうしたら良いのだろうかと思う。

俺は、どこにむかってあるいているのかもわからなくなってきた…。

俺自身、いま何に怒り、何に怯え、何を望み、何をすべきなのか。そう、自分がしなくてはいけない使命を全うするという事も大きな課題であるけど、俺自身はどうなるのか。俺だけがこんな常に苦渋の選択肢を余儀なくされるのは納得できなくなってきた。

歩いていても前後不覚になり電柱に肩をぶつけて歩いた。街灯の光は昼の時の光より強くないのに、街灯の光の当たる所だけとても明るく、むしろ、昼光より街灯が光る時の方が賑やかに見える。

逆に街灯の当たらないひっそりとした街の暗闇は、俺の体を包み込むようだった…いや、闇が俺を包み込むというより、俺自身がそ

の暗闇に溶けてしまったからなのだろうか……。

俺はもう自分が何故生きているのか分からなくなった。そして、俺はこの暗闇のように人生の先が見えなくなった。何もかもどうでも良くなった。……俺は生きていてはいけない……俺が死ねば、償えないが少なくともこれから起こる災害は防げるだろう……と、冷たな声が聞こえる様な気がした。

背後から気配がすると思った時に、

「……お前はあの目の前にいた哀れな青年の死でさえも止められもしなかった。君はまるっきり人命を救えていないじゃないか。……忘れ物だよ。」

歩いていると不意に後ろから聞き覚えのある声がした。

「だめじゃないか。君がこれを持っていなければ、何も始まらない。」

俺は、当惑した。そいつは、何もかもお見通しだというような口調だった。

「……俺に人命を救うなんて、甚だ無理だったんだよ！ それよりも、俺がそこまでする必要ってあるの？ なんて目的を果たさなきゃいけないの？ “なんで、俺が人を殺さなきゃいけないの!?”」
俺は、その時まで感じてきた怒り、苦痛、矛盾をそれらの言葉たちに込めた。

「……どうしてそこまでして、目的を達成しようとするかって？……お前はまだ思い切れていない様だが、形ある物が壊れるように、命が途絶えるのは抗えない宿命だ。つまり、人間は死ぬ為に生きてい

る。社会でも、生産があるから消費があり、消費があるから生産があるように、死があるから生があり、生があるから死がある。言い換えれば、生と死は表裏一体の物なんだよ。」

「……消費と生産？消費…生産…。人の命が単なる生産と消費？」
「ハハハ…。ごめんね、君に大人の世間知が通用しないと分からなくて。」

そいつは、嘲笑……自嘲も含んだような笑いをした。

「君はこのゲームにおいて大変重要な役割を担っている、君を中心に全てが回っているように。君が小さい変化起こしても、周りを回る者には大きな変化となる。それが、今君の置かれている立場だ。しかも、私とお前がこのように話せるのはこれが最後の機会だ。私は色々やったが、とうとう奴らに嗅ぎつかれたようだ。お前も私との接点が合ったことが分かれば、お前の身と‘それ’が危険に晒される。」

「……？？奴らって何だよ？なぜそんなに恐れるのか！？」

「…奴らの存在は、はっきりとは分からない。しかし、奴らは我々の知識を遥かに超えていて、我々の既成概念を否定するような存在…あるいは、それに準じたものを持つ者であることは間違いない。だから、お前がそんな奴らにこれを渡してしまったら、何もかもが終わりだ。お前の命、延いてはこの世界をも破滅させる事になる。」
そいつは、紙を差し出した。

「協力者がそこに居る。ずっと奴らから逃げる事は出来ないが、当分はそこで匿かくまって貰える筈だ。」

「……逃げるっていう事？」

「ああ…そうだ……。いい加減、事実を認めて、決心しろ。お前はもう引き下がれない。なおかつ、お前には失うものは何も無いだろ。」

「……えっ……」

言葉が続かなかった……

何も無い…失う物…何も？…無いの？…ナニモノナイ？……

気がつくとも俺は今まで寝ていて、俺の目が覚めた時、まだ夜は明けていなかった。

魔うまされていたのか、服は汗で濡れていて、体には緊張が残っていた。体を起こして辺りを見て状態を把握すると、俺は、とある公園のベンチの上で横になっていたようだ。暗い公園には、昼間の様に賑やかな子供の声はしない。ただ、そこには俺がたった一人置き去りにされたように居るだけだった。

ふと、視線を自分の胸ポケットにやると、紛れもないあのペンが刺さっていた。俺はその事に狼狽ろうたいし、さっきまでの事が、どこからが夢で、どこからが現実なのか分からなくなった。

そして、あのホームレスの存在に対する疑念と恐怖心が沸いてきた。

俺は、これから先の事が全く見えなくなった。

人が夜を怖がらなくなったのは、光を自らの手に入れられる様になっただけではなく、夜そのものが必ず明けると分かっているからだ。

俺はこの夜がいつかは明けてくれる事を願った。

第7章 嚙矢（前書き）

寒いですね。

遅くなりましたが、どうぞ。

第7章 嚙矢

勝手に学校を飛び出して、そして誘拐されるなんて、親や友人に合わせる顔は無かった。いつも俺は、勝手な事をやって逃げてきた。そうだ、いつもそう。……また、俺はやり投げの状態にするのか。

俺は、普段の生活を捨てるしか方法は無いと薄々感じていた。様々な事がまさに壊滅的であった。だから、自分の中に慣れと言うものがあるとすれば、あつてほしかった。それは、良い事ではない事は十分に分っている。しかし、このゲームに勝つ、負けると言う前に俺の精神の方が負けそうだった。これから俺はどうすればいいのか、一切見当も付かない。しかし、俺はこの生活を捨てて、償いも含めた逃避行に出るしかないと思った。……やるしかない。

とりあえず家に戻った。親は相変わらず忙しいのか、家にも帰っていない。留守番電話の中には警察からの物が数件録音されていた。俺は決心を再度確認し、自分の小遣いや貯金をかき集めてきた。服も着替えて提示されたところへ向かう為に駅へと急いだ。

不安という言葉が、俺の中で何度も現れたが、もがいて何とか振り切ろうとした。一時的にでもいいから別なことを考えて、その事を忘れようとした。そうでもしなければ、俺は一步も前には踏み出せず、その場で止まって居るだけになりそうだったからだ。

夜明け前、俺は始発の電車に乗り込んだ。ラッシュ時の混雑がまるで嘘の様に、乗客がまばらにしか居ない車両には、沈黙があった。それは、何だか不思議な感覚だった。

電車は、いつもよりも軽やかに加速し始めた。俺は、MP3プレイ

ヤーにイヤホンを差し込んで再生ボタンを押した。シャッフル機能になっていたのか、適当に最近は余り聴かなくなった楽曲が流れ始めた。その楽曲の歌詞を今までは別にただの音として聴いていたが、改めて今聴いてみると、一つ一つの詞が頭に残り、それが自分を鼓舞するように思えた。

電車が停車すると、一人ニット帽を被った人相の悪い男が、席が沢山空いているにも関わらず、俺の目の前に立ってきた。嫌な予感があったが、目の前に立たれたので席を移ろうにも移れなかった。

男はポケットに手を入れて、もそもそと何かをいじる素振りをした。次に何かをするだろうとその男の手を掴もうとしたが、相手の方が早かった。男は、スプレー缶のような物を取り出し、それを俺に吹き付けた。すると、俺は不思議と強烈な眠気に襲われた。そして、前後不覚になり、意識は途切れた。

気が付くと、電車の中には多くの乗客が居た。前に立っていた男の姿も無かった。しかし、何か違和感を覚えた。胸ポケットにあるはずの‘ペン’が無くなっていた。俺は動揺を隠せず辺りを見た。よく見るとあの男はドアの近くに立っていた。電車は駅で停車し、男は俺が目を覚ました事に気が付いたのか、その駅に降りた。俺は、間違いなくあの男が盗んだのだと確信した。そして、俺も透かさず車内の人混みを掻き分けて電車を降りて、男を追った。溢れた人は階段の所で一気に混み合った。男は、他の人などお構いなく、押し退けていった。俺も申し訳ないが、流れを掻き分けて追いかけた。しかし、階段を上った改札の所で人混みに紛れ、男を見失った。俺は悪態を付いた。どうしたら良いかも分からず、ただ、人の流れを見ている事しか出来なかった。

すると、電話が掛かってきた。非通知拒否を恐れたのか、それは非通知でもなく公衆電話からでもなかったが、番号は明らかに存在する筈のないふざけた物だった。

” 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 ”

俺は一応電話を取った。そこから変声機を使ったと思われるような変な声がした。

「こんにちは…初めまして…君はこのペンを持っていた者かな？…今我々が依頼した男がそのペンを預かっている…」
威圧的に話す口調を聞きながら俺は憤りを覚えた。

「…………お前らは何者だ？」
「…我々はこのゲームの参加者であるけれど、君たちに手を貸す事は出来ない。なぜなら、我々は、君たちの敵だから。」

予感がこんなにも早く現実になる事、それが恐怖へと変わっていった。喉をえぐい物が刺激しているような嫌な感じがした。ある人は、それを戦慄と言っのたろう。

「…………早く、あのペンを返せ。」
「……………君は前に『なんで、俺が人を殺さなきゃいけないの!？』って言っていたじゃないか。我々は君の代わりに汚れてあげようという気持ちなのだから。我々はもうこれ以上汚れた所で何にも成らない。我々には失うものが無いのだから、失う恐怖も無い。」

なんで奴らはあの事を知っているのだからかという疑問が浮かんだ後、背中に冷たい物が走った。そして、途轍とつもなく大きな存在が目先に居座っている焦燥感のような物を感じ、俺の鼓動が激しくなった。

「…どこでその事を聴いた!？」

「偉大なる月と太陽は、いつもお前の事を見ている。」

「……?…どういう意味だ。」

「フフ……そんな事、今はどうでも良い…君は我々の出す試練に勝てば良い。」

「………じゃ、試練って何だ!」

「……お前から『ペン』を奪った者が我々の用意したバッグを取りに来る、そのバッグの中にあのペンを入れて持ってこさせるつもりだ。もし、君がこのゲームに勝てる程の者ならば、その男を警察より先に捕まえられるはずだろう。但し、条件を与えてあげよう。この電話を終えたら直ぐにその周辺の地図を転送する。そして、ゲームらしくするためにはフィールドが必要だ。君の降りた駅、3?四方は警察が検問や規制をすぐに張り始める…また、我々が君が乗っていた鉄道を使えないようにして、君も男も逃げられない一時的に陸の孤島のようにする。どうだ、面白い計らいだろ。」

このゲームのルールは、単純にその男を捕まえれば君の勝ちだ。但し、警察に先を越されてはだめだ。何故なら、君はそいつからペンを回収する事が出来なくなるからだ。少なくとも、その男が上手く変装等をしなければの話だがな。つまり、男を見つけ出すか、男の通りそうなルートを予測して捕まえるといようなゲームだ。面白そうだろうか?」

頬の筋肉に力が入った。

「お前たちには、卑劣というのが褒め言葉なのだろうか。こんな事をして、どれほど多くの人が迷惑を被るか分かってているのか。…俺は別にお前たちのゲームに遊ぶ気にはなれない。ただ、ペンを返して貰いたいだけだ。」

「……フフ…。我々があのペンを持っているという意味を君にはもう一度吟味して貰いたい。君にも分かってくれたかな。そう、つまり、我々の手にこれが渡ってしまうという事は、全世界の人間を人質にするのと同じなのだから。さあ、君の汚れた手で我々から奪い返してみるがいい。」

あのホームレスの懸念が現実のものになるうとしていているということを再認識した。

「……まさか、その言いようだと、お前らはあのペンの法則に気が付いているのか……ならば、この状況下では否応無く、挑まなくてはいけないようだな！」

「…期待通りの答えだ。我々がペンの法則について知っているかどうかは、まあ、君のご想像に任せるが…。」

「その男の名前を教えろ！」

「フフ…良い着眼点だね…男の名は『タブチ ヨシハル』。……」

…まあ、問答はこれくらいにしておこうか。一応君の健闘を祈ってあげるよ。」

これを最後にして電話は切れた。再度電話しようと着信履歴から発信したが「お掛けになった電話番号は、現在使われておりません…」と聞こえるだけだった。

俺は悪態を付き、今持っている携帯を仕舞おうとした時、メールが入ってきた。確かにそこには、周辺の地図が添付されていた。

しかし、そうは言ったものの、どうしたらいいか検討もつかない。警察よりも先に捕まえる？ そんな事は不可能に等しいじゃないか。もし、そんな記憶と地図を手掛かりに捕まえらるなら、警察なんか要らないだろ、と思った。

駅を出て右往左往していると、ロータリーでクラクションを鳴らす車が一台あった。その車は、そのまま俺の前で止まった。

「お前があいつからここへ来るように指示をされた奴か？」

「…多分そうだ。」

「なら、話は早い。早く車に乗れ。時間は俺らの事を待つてはくれねえからな。」

俺は、一瞬訳が分からなかった。

「なにボヤつとしてやがる。電車が止まっているから迎えに来てや

ったのにヨ。」

俺は、果たしてこの人が本当にあの紙に書かれた協力者なのか半信半疑だった。奴らが、あの時の会話を盗聴していたのであれば、替え玉としてこいつを送り込んでくるかもしれない。だって、あのペンを強奪するような連中だ。何をしてくるか全く予測する事が出来ない。だが、かと言って俺は自分一人でそいつを捕まえることなど出来るだろうか……いや、出来やしないだろう……。

俺は無意識的に車に乗り込んでいた。

「……さつき、奴らから電話があった……。」

「……それはどういう内容だったか？」

「タブチヨシハルという男から例のペンを取り返すという内容。」

「……タブチヨシハル……何？ペンを奪われたのか？それはつかうかしていらんねえな……奴らに先を越されちまったか……チツ……屈辱だな……」

苛立ちを隠せていなかった。語勢がさつきより強くなった。

「全く、手の込んだ事をしてくれるじゃないか……」

「……奴らから地図しか手掛かりを貰っていない……どうすれば良いのか……」

「……ほう、地図が送られてきたのか。」

「……？それがどうかしたか？」

「……その地図は大きな手掛かりだ。」

「何故？ここにはそいつが通るルートなんて記されていないんじゃないか……」

「いや、相手はどうしてもペンが欲しい筈なのに、どうして敵に手掛かりを与える？」

「それは……ゲームだから？」

「違う……もっと単純に考えると……」

隣に座る横顔は意外にも曇りではなく、目標をちゃんと見据えているように見えた。完全に信じるか信じないかという迷いがある。しかし、指針も無いままだった俺を引き上げて、糸口を手繰り寄せたのは、この人だ。

俺自身では、この大きな問題に対しどう対処した良いのか、全く分からなかった。だから、俺は『一人で抱え込まなくて良い』という事も心の支えに成りつつあった。

第7章 嚆矢（後書き）

筆者は、なるべく1ヶ月に1章を目標に書いてきました。しかし、事情によりこれから更新が滞る事を、読者の皆様にお詫びをしたいと思います。

今まで読んで下さった方々に、しばらくの別れと感謝とお詫びでした。

座時点

第8章 疑惑（前書き）

試験前なのに勉強もせずに、投稿してしまいました。

本当は前々に9割がた完成していたのですが、なんか気に食わないというか、まとまらないというか、なかなか投稿に踏み切れなかったのです

ならば、何故今なのか。ふと、整理していたら、まだ投稿していなかった事を思い出したというか、勉強が出来ない事への逃避なのかもしれないです。

一応投稿したものの、多分続きは早くても3月になると思います。

そのまた一年後にならないようにと思うのですが、身が入らないし、出来ないのです。まあ、今日投稿したのは、ふさぎ込んでいた頭を切り替えて、投稿に踏み切ったのが本音でしょうか。

私の駄文を待ち望んでいた方には申し訳なかったと思います。でも色々と悩んでいたので……

こんな事を書くなら、続きでも書けと思うかもしれませんが、そこはご理解頂きたいと思います。

第8章 疑惑

車は気だるいように走り出して、ロータリーを一周して、信号で止まった。窓の外からは地方都市の寂れた狭いアーケードが見えるが、人はそう多くは居ない。ただ、彩りに乏しい服を着た人々が歩いていた。車内に目を戻すと、協力者が手がかりだと言いつけるカーナビはこの車とは若干ミスマッチのようにも思えた。時代の流れに取り残されたような車載用機械式ラジオとハイテク機器であるカーナビが同じ空間にあるのだから……。

「この車…大分古そうに見えるけど。」

「……。まあな。まあ、1つこの車から教わった事があるが。無料ほど高い物はないっていう事さ。」

「……」

「…メンテとか面倒だし、よくエンストも起こすし、良いことなんてそう多くない。でも、こう乗っているとこんな旧式でも愛着が湧いてくるもんだ。愛着が無ければ、とつくに廃車にしているけど。」

そんな事を言いながら、車は再び走り出した。

「そういえば、名前を聞いていなかったな。ちなみに、俺は栗田だ。お前は？」

「……まだ信用している訳じゃねえし。」

「あっそ、可愛くねえの！じゃ、お前つてずっと呼んでやる！」

口元が緩みながら、そう言った。

このカーナビの地図と奴らから送られた地図を見比べると、細い路地などが省略されているが、大通りは省略されてはいない。しかし、この道を見ると、細い道ではないが、見事に無い。この道の先にあ

るのは……。

「バスターミナルのある大きな駅、

奴らの手によって、列車は運行していない。となると、乗客はバスを利用しようとして殺到する。そのどさくさに紛れ、満員のバスに乗れば……。

急な検問や規制に対応仕切れない警察は、乗用車やタクシーの様に締詰め状態のバスから運転手や乗客の身元を確認するためにいちいち降ろしたりする事はないだろう。警察は、タブチが危険を冒してバスに乗らないだろうという先入観がある。また、検問による規制が強ければ、バスターミナルから発車した多くのバスやタクシーを処理仕切れずに、通勤時間帯の急いでいる乗客が暴徒化する懸念があるからだ。

「実はタブチは白いバンを所有している、バンに乗って、そこからターミナルでバスに乗るかもしれない。その白いバンはタブチの所有であるということが知られているからだ。」

どうして、栗田はそんなことを知っているのか疑問には思ったが、ターミナルに向かうことに決まり、バスのターミナルがある駅を指すことにした。栗田の握るハンドルに力が入った。やる気の無さそうなこの車も、アクセル全開して、驚いているように変な音を出していた。

「今の自分にとって一番大切な物って何だろう、という疑問があった。よく一番大切なのは命だ、と言うけれども、命、それに付随する人生という物が自分の中で考えが変わってきたというか……」

栗田は、静かに聞いていた。俺は、何だか心の中から流れた言葉を言っているの、文法的に良くない発言をしているのは分かっていた。でも、ストレートに口から出た言葉だった。

「人生 命 という物は、その人が、その人として存在する……
フっ、やっぱり、そういう宗教的な事は分からない。命が何だかな
んで、科学などの普遍的な知識ではそんなことを教え導くことはで
きない。なぜなら、それは客観性に基づくのではなく、人それぞれ
の主観だからだ。よく、他人がああしろだ、こうしろだの言うけれ
ども、本当は、それはその人の中での主観であって、本人の主観で
はない。だから……お前は、自分で答えを見つけなければいけない
だが、俺は一応協力はするけれども。」

俺は、多大なる災害に無力である事を痛感していた。それで、自分
に対して、不信感や劣等感、いや、悔しさを募らせた。常に、人の
目に負い目を感じ、自分一人が暗闇の中に置き去りにされていたよ
うな状態だった。だから、他人にどう接し、どう感情を表現すれば
分からなくなっていた。いつも、そのような感情を内に秘めて、作
り笑いをしていたけれど、自分が人として他人に自分の気持ちをど
う発信すればいいのか分からず、逆に自分の言っている事など信じ
てくれる筈もないという様に見放されたように感じていた。

苦しい…辛い…助けて…

複雑な感情の動きを抜きにして、自分の気持ちを表すとすればこの
様になるだろう。いくら、強がっていたって、どうにもこうにも、
心の奥には弱さがあった。

「辛いなら、我慢しないで泣いてしまえばいいさ。人なんてそんな
に強くない。だから、ずっと強がって立っていられるわけ無いし、
それならば、いつそ泣いてしまえばいいさ。締め付けられる感情を
解くには、泣いて、心の中にあるその溜まった感情を出すしかない。
まあ、そんな風に溜め込める事が出来る感情のダムをいきなり壊す
事なんて出来ないだろうけど。」

絶望に打ちひしがれる前に、前を向いて、今自分の状況を見直してみると、大抵それほど深刻な状況ではないと気が付く。でも、生きていくというのは、ただ、快樂のみを享受するものではないから、そこには辛辣な出来事があるし、むしろ、そういった事の方が大半を占めているんじゃないかな。

だから、お前は泣いた分だけ、強くなれ。」

案の定、バスターミナルには、通勤通学者で溢れていた。しかし、バスの運転手はバスの扉の前で客に対して、何か説明をしているような様子が伺えた。つまり、おそらく、運転手は警察による規制を知っていて、この区域からは出られないという事を客に説明しているのだろう。すると、サイレンを鳴らしながらパトカーが数台、ターミナルに入ってきた。中から警察官が出てくると、拡声器で何か言い始めた。

「えー……みなさんには、多大な迷惑をかけている事をお詫びします……えー…今現在、連続殺人犯がこの地域に出没したとの情報が入り、緊急規制を敷きました。その為、交通に大きな支障が出ています。ですので、出来る限り、支障を減らす為に、このターミナルにて、身元確認を行い、確認が出来次第、バスに乗車して、目的地へ迎えるようにとバス会社と折り合いをつけました。えー……鉄道につきましては……」

栗田に腕を掴まれて、路地に入った。

「何、いきなり掴むんだよ！」

「……お前の様子を見ていたら、あの群衆の中に飛び込むんじゃないかと思ってね……ああいう事を言われたら、タブチもここから離れるに違いない。」

すると、電話が鳴った。番号は、さつきと同じ。

「残念だが、君達のロジックにはまだ不十分な点があった。不十分だが、まあ、我々の予想通りにここに来てくれたのだから、スターラインに立つ権利は得たという訳だ。」

「……散々、人を虚仮こけにしゃがって!」

「ああ、そうさ。散々、虚仮にしたさ。こつちからはそうやって右往左往している君達の姿が滑稽に見えるから。ハハハ……。もう遅いかもしれない。彼は、もう既に君達の予想を超えた所にいるかもしれないな。」

「……ああ、そうかい。お前の眼に俺たちがお前の陰謀を阻止し、憎々しい姿を焼き付けてやる!覚えておけ!」

「フン……。威勢だけはたいしたものだな。まあ、それくらいでなければ途中で挫折してしまうだろう。せいぜい、奪い返してみるがいい!」

電話は切れた。完全に読まれていた……

奴らは、滑稽だと言っていた。もしかして、滑稽とは、自ら居場所を知らせていた事なのか。これは、大きな問題だ。だとすれば……

それ以上に滑稽なこと……

もし、滑稽ならば、どういった事が最も滑稽だろうか……いや、それだけは考えるな。……だが、最も滑稽だと思えるシナリオはどう考えたって……栗田の正体はタブチで、俺は栗田と一緒にタブチを追っているが、本当はタブチの逃走を手伝っている、という灯台下暗しのような状況だ。……いや、そんな事は……ありえない……何故

なら、栗田とタブチの顔は……顔……そう言われてみれば、何となくは分かるが、人混みの中で一瞬だけ見た顔を細部まで思い出すことは出来ない。思い出すのは、タブチの服装ぐらいだ。……ならば、顔が違うと断言出来ない……。ならば……。……いや、いくら疑心暗鬼であるとはいえ、そこまで人を疑えば、俺は人を信じる事が出来ないじゃないか。まして、たった1人で立ち向かうのかい？この現実逃避に走ってきた弱い人間の俺が？

……やはり、あの栗田は奴らの仲間で、俺の自由を奪う為なのか？いや、違うと信じたい……でも、何故奴らはずっと俺の行動を熟知しているのか、全く分からない……

それは飛躍し過ぎる論理に思えた。

「奴らは、俺らの行動を把握しているのか？」

栗田は、静かに尋ねた。俺の表情の変化を見て、先に怪しまれないようにということか？……いや、そんなバカな……でも、なにが真実か分からない、逆に裏の裏を読みすぎて、判断がつかなくなる。言ってしまうえば、俺は真実と疑惑と殺戮が入り乱れる狂気の中にいるのだから……

「ああ……やはり、そうみたいだ……」

栗田は、やはりと言わんばかりに頷いて、

「賭けだが、一つの可能性がある。……その携帯の電源を切って、電池を抜いて置いてくれないか？」

最初、何を言いたいのか分からなかった。

「いいから、早くしろ！」

若干、苛立ったように言った。でも、言われた通りに行くか迷った。これはわざと俺に信用させようという策なのか？だが、携帯の電源

が切れた所でこのゲームにどんな影響があるだろうか……

落ち着け……

何を考えている。

考えすぎだ。

確かに、思っているような影響は無いだろう。むしろ、栗田の言う事に耳を貸すべきだ。まず、信用するのが重要じゃないか？少なくともここは協力しなければ、タブチを捕まえないだろう。

携帯の電源を切った。

「……何故、奴らが俺らの動向を知り、コンタクトを取れるのか、という事を考えた時、いつも携帯電話が介在していた。さっきの二つの要素を結び付けると、その携帯電話に疑問を持つ。もし、奴らがその携帯電話に細工　ウイルスに感染させる等　をして、奴らに位置情報を発信するようにしていたら……ウイルスによって、俺らの所在を奴らに発信するのは不可能ではないだろうな。なぜならば、多くの携帯電話にはGPSが入っているはずだ。それを利用すれば、所在なんて簡単に発信出来るだろう、理論的には。」
冷淡に言い放った。さっきと違って、そこに何かしらの感情が無いように。

「……じゃ、まさか。俺は、奴らに居場所を教え、タブチの逃走に加担したかもしれないのか？」

「……いや、まだそうだと言った訳ではない……。あくまで、憶測だが……」

「……それと、奴らは『我々の予想通りにここに来てくれたのだから』」

ら、スタートラインに立つ権利は得たという訳だ。』と言っていた。

「ほう……」

「早く、移動しないと！タブチは、俺らの居場所を把握していたかも知れない。早く、逆の方角へ！」

「おいおい……そんなに慌てても、事は好転しない……奴らがスタートラインに立てたとか言っていたが、それはタブチに関する手掛かりがここにあるっていう意味じゃないのか？」

いくらなんでも、考え過ぎじゃないか、と心の中で思った。あれは、ただ単に奴らの予想通りに俺らがここに来たという意味の発言ではないか。

「……もしかしたら、本当にここにタブチがここに寄り、そのあと別な手段で移動したかも知れない。タブチ自身が、俺らを攪乱させようとして……」

そう、解説を加えながら栗田は歩き出した。どうなるか、分からないが少なくとも、栗田なりの勝算は有るのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6203g/>

生と死 ~ ペンは剣よりも強し ~

2010年11月5日11時56分発行